

いわき市立三和中学校

実践研究テーマ：自分らしい生き方を探究し、自己実現を目指す生徒の育成 ～地域に根ざしたキャリア教育（ふるさと教育）の実践を通して～

1 研究テーマ設定について

本校では、「創造・自主・健康」を教育目標に掲げ、コミュニティ・スクールの機能を生かし、学校・家庭・地域が一体となって地域社会に根ざした特色ある学校づくりに取り組んでいる。生徒が地域の課題を自分ごととしてとらえて学び続け、ふるさとに誇りを持ち、地域社会で活躍する人材として成長するために、自分らしく自己実現できる生徒の育成を目指している。



2 生徒の課題（児童生徒理解のためのアンケートから）

「自分の将来に夢や希望をもって学習に取り組んでいない」「授業で理解したことを伝えたいという思いを抱く生徒が少ない」という課題が見られた。そこで、「夢や希望をもち主体的に学び、多様性と寛容性をもとに他者の立場で物事を考え、豊かな言語力と表現力を身につけ、自分の考えを伝える生徒の育成」をキャリア教育の重点目標とし、昨年度から2年間取り組んだ。

3 昨年度の公開授業を振り返って

- (1) 1日行事に関する話合いだったため、今年度は継続的な内容に関するテーマを設定し、学級活動で話合い活動をする。
- (2) 本校の強みである「地域と連携した地域学習」を生かしたテーマを、話合い活動のテーマとして設定する。
- (3) 「総合的な学習の時間」の取り組みと「学級活動」で、横断的な内容を設定する。

4 研究推進にあたって

- (1) 将来に目を向けた学習
アカデミア・コンソーシアムふくしまの協力のもと、「未来の起業家育成プログラム」に参加して、自分の将来や地域の将来に目を向けた学習を行った。全校生で、三和の課題と魅力について話し合い、三和の活性化について具体的に考えることができた。



(2) 地域人材の積極的な活用

地域おこし協力隊溝端さんの協力のもと、地域人材を活用したゲストティーチャーを講師にして、学級活動を行った。溝端さんが、地域を活性化させるために協議した方法を、三和中をさらに良くするために協議する方法として、公開授業の際に活用した。



5 実践研究発表会での公開授業（1学年学級活動）より

1学年 学級活動（1）

ア 議題 「三和中『推し活』プロジェクトをしよう」

イ 本時のねらい

三和中学校の魅力や課題をもとに、小学生が中学校生活を楽しくに思えるような紹介の内容を、互いの考えを認め合い、合意形成を図りながら決めることができる。

1月に実施する「新入生説明会」で、1年生が中心となって、小学6年生に中学校生活について説明する。説明する内容を決めることについて、議題提案者が議題と提案理由を説明し、学級で話合うことにした。

- ・事前の活動
どのような説明会にしたいのか、アンケートを実施し、提案理由をもとに、アンケートの意見を学級で整理した。
三和中学校の魅力・課題について意見を出し合い、KJ法を用いて分類した。

- ・本時
意見交換を通して、新入生説明会をどのように進めるかについて、合意形成し、司会の生徒を中心に決定することができた。

終末の講評では、学級担任より積極的に話し合い活動に参加し、自分の考えを発言できていたことについて称賛の言葉があった。

- ・事後の活動
新入生説明会の準備を進めている。



いわき市立三和中学校

実践研究テーマ：自分らしい生き方を探究し、自己実現を目指す生徒の育成 ～地域に根ざしたキャリア教育（ふるさと教育）の実践を通して～

5 実践研究発表会での公開授業（2学年学級活動）より

2学年 学級活動（1）

ア 「三和町元気大作戦

～三和デイサービスで利用者の方々に喜ばせよう～」

イ 本時のねらい

他者との話し合いや協働を通して、施設の利用者が楽しめる企画を決めることができる。

・事前の活動

「総合的な学習の時間」に実施した福祉体験活動を通して、「福祉」に関する学習を深め、ボランティア活動について学んだ。そして、地域の行事である「三和町フェスティバル」にボランティアとして参加することについて、「学級活動」で話し合い活動を行った。



・本時

三和デイサービスへの訪問が施設の方々から好評で、生徒からもまた訪問したいという意見があり、訪問が決まった。「利用者の方々に喜ばせる催しは何か」について、合意形成する中で、他者との話し合いや協働を通して、自分たちの活動をより良いものにしたいという意見がまとまった。学級担任より、意欲的に話し合い、意見を出し合ったことについて、称賛があった。

・事後の活動

話し合いで決まったことについて、役割分担を行い、施設訪問の準備をした。12月に、再度三和デイサービスを訪問し、話し合い活動で決定したことや準備したことを披露し、利用者の方々に喜ばれた。このことによって、学級でも級友のことを考えて行動することの大切さに気づくことができた。



6 研究の成果

2年間の実践研究を通して、教職員の「キャリア教育」に対する意識が大きく変化した。特に今年度は、学級活動だけではなく、各教科でも「キャリア教育で目指す子どもの姿」について各教科の視点での手立てを講じて、取り組むこととし、事後研究会で協議した。

また、話し合い活動を、学級活動だけではなく、各教科の授業で意識的に導入した。生徒には、自分の考えを表現することに苦手意識があったが、話し合いの機会が増えるにしたがって、徐々に自分の考えを伝えること、相手の考えを聞くことが自然にできるようになっている。



7 生徒の学校評価アンケートから

「学校を楽しんでいる」、「教師は生徒のよいところや努力を認めたり、褒めたりしている」といった自己有用感に関わる内容のアンケートに、7割以上の生徒が肯定的に回答している。このことから、生徒がキャリア教育も含めて、学校生活を通して自己有用感を高め、自信をもって学習に取り組んでいると考えられる。



8 研究のまとめ

キャリア教育を通して、小・中学校の連携がさらに充実し、9年間を見通して学ぶ環境の大切さにあらためて気づくことができた。例えば、話し合い活動に必要なコミュニケーション能力や、他者の意見を聞き合意形成を図る態度など、短期間では身につかない力を、段階的に9年間のスパンで身につけることができるということを実感した。

また、地域の人材を活用した授業や活動が、生徒の言語環境を広げ、新たな視点をもつことにつながった。今後も、キャリア教育実践研究校として学んだことを生かし、自己実現を目指す生徒の育成に力を入れていきたい。

